

〔史料紹介〕

渡部平太夫・渡部勝之助

『桑名日記・柏崎日記』 (その二)

松川由紀子

同年一月二十日

早川が餅つきに手伝ひにきて、鎌にかゝり合ひ、出放題に、鎌こりよつくりむつくりよの物語、りよのめりよんどでりよつとした、りよりくそといふたら、それが面白くてならぬとて、じきに覚へて、てつこてつくりむつくりての物語じやの、おばとおつくりむつくりをの物語、おのめをんどでをつとしたおりくそ、などとはやごとにていきおいこんでしやべる。

同年二月二十一日

鎌たびたび甘酒を行平でわかつて飲む。鎌だだおこし、おばの髪をつかみこわし、せなかへはなをこすりつけたとて、内へつれてきて、四人がゝりで、ちり毛へ灸を七つばかりすへる。

同年四月二十三日

鎌こ、おめこ、おかんこ、へのか、ちん

ぼが口についているには困る。灸をすえてやるぞとおどかすと、ごめんごめんとあやまる。その後から大口をきく。

同年七月四日

夕方三ぼうにとうふをのせ鎌にもたせ、四日月様へ供へさせ、ほうそうをかるくさせておくれませと言わせて御じぎをさせる。一度さへ供へさせればよいげな。毎月三日月様へは豆腐をそなへる。これは目わすらわぬように願ふなり。

同年七月十五日

七つ八つのにくまれざかりというけれど、もはやそろそろにくまれ口をきく。十一日におてつが来たれば、新地の焼けぼほがきたというたげなが、おてつ返答に困つたげな。

同年七月二十二日

昼より日記を読む。所々おろくの事書いてあり、くわくらんのところをみ大いにおどろく。しかしさつそくころよくなくなりよろこぶ。その外いろいろのこと書いてありわらひ申す。鎌も越後のおとつさが書いてよこしなかつた日記をよむから、よくききやれといへば、あばらがいかいたのかといふ。そのやうなにくまれ口をきくと、おとつさよこしてくれといふてよこしたから、おとなしくしなへと越後へやるぞといへば、誰がいくもんだといふ。しかるとおつかなへ、じさまにけんけがはいたといひながら逃げる。おばぶがしかれば、おつかなへばさまにけんけがはへたといふて逃げる。

同年八月二十一日

草双子を見るやら、五十三次を見るやら、

百人一首を見るやら、鏝のあいてになるも甚はだ面倒なり。

同年九月七日

鏝おじいさ寝なんかといふゆへ、小便して寝る。おじいさむかし語ろうか。アノネ松の木に猿がのぼっていたそう。人が見つけてのぼつていつたら、猿がちよこちよこ逃げて行つたそう。それでいちがさかへた。サアこんどはおじいさの番だ。裏へ狐が来ていたそう。鏝が二階へ上つて見ていたそう。雨が大降りになつてきたそう。それでどこかへ行つてしまつたそう。それでいちがさかへた。そうでなへ。おじいさのは、うそだ。裏へ狐がきていたそう。おこんさが佐藤へ武さ啓さを迎へにいきなつたさう。そしたら金山の金司さが飛んできたさう。二階から見ていなくなつたら、墓所から本尊さんの方へきたさう。雨が降りになつてきたら又墓所の所へきて、身体をぶるぶるさせて、石塔の上をひよいひよい飛んで、そして郡の方の垣の中へ入つてしまつたさう。それでおしまい、いちがさかへた。お

じいさ、もうねぶろうかとすつこむ。

同年九月八日

今日は雨ふりで、鏝内にばかりあくれており、てうずにゆくと後よりとんできて、おじいさと一集にしつこをしようといつて、てうずどこへ並んでしながら、おじいさのちんぼもゑらい、おれのちんぼもゑらからう。おばばのは毛ばつかりだといふ。みんながききつけて笑ふ。

同年十一月二十四日

鏝に大学の初めをそらで読ませ、そのたがわざるに近しまで、どうかこうか言ふうち寝ていく。

同年十二月十九日（鏝之助六歳）

抱いてねるとおじいさ百人一首よみなへといふ。天智天皇秋の田のと読んでやると、その通り鏝もよむ。

一八四二年一月三日

鏝七ツ過より熱が強く出てきたとみへて、こたつに寝ていたげな。一角九五つのませ、それからせきが出るで、砂糖湯をのませる。

同年一月十日

朝飯すぎになると、子供がどんど焼するから、鏝さきなへと呼びにくる。袖なし羽織をきせ頭巾をかぶせてやると飛び出してゆく。

同年一月十一日

鏝之助のたこを好きといふは、今朝も朝まをたべると二枚張をあげてもじき落る。四枚をあげてくれとねだる。武八をたのんで新矢田の西までゆきあげる。それから出屋敷の方までゆきあげる。うちへもつてくる。落る。こんだはふうわりをあげてくれとねだる。ふうわりには風がちと強すぎてどうもならぬ。

同年二月八日

鏝水餅を焼いてふぶきもちにしてたべ、おまんまも三ぜん食べる。この頃はお汁をたべぬ故、鏝はおつけをさつぱり食べぬから力が落ちて、さつきもうなりを振り廻してもさつぱり鳴らなかつたといふたれば、汁も二ぜん食べ、ぢきにうなりを振り廻すうちと鳴る。それみやれおつけをたべたら強くなり、うなりが鳴るはいふたら、

うれしがる。それからそのうなりを、たこにつけてくれとねだる故つけてやる。

同年三月五日

横村兄弟、鐐三人して川端に遊んでゐる所へ、隣の熊市が投げた石、鐐の額に当り団子のやうなこぶが出来、めそめそ泣いてゐる故水をつけてもんでやる。どのやうにいたかつたであらうに、こゑをあげずめそ泣いてゐる。なかなかきじやう也。

同年三月十四日

鐐之助はやくおき御めざましはなへかへといふ。せんべいより外に何もなしといふたれば、おせんべいはいらんといふ。まもなくまんぢうをもらふゆへ、二つ三つ焼いてやる。鐐之助昼よりむすびを持て今一色裏へ、官藏、啓司につれられて釣にいったげな。うなぎの子、どじよう、はい、もちなど、ほうぼうよりもろふてきては、たま桶に入て置くなり。

同年四月十二日

鐐この間草双子を持ち出し、おじゐさおしへてくんなへといふ故、これは誰これは誰々と、これは何といふ人と云ふてきかせ

る。

同年四月二十一日

鐐がねだる故紙でつぼうこしろふてやる。

茶の間より部屋唐紙に当てはよろこぶ。

同年五月二十五日

鐐こ毎日ねば土で泉水こしろふとて、子供をつれてきて、手足きものをよこすには、おばとも困りはてる。

同年六月十六日

鐐腹下りにつき一角丸五粒のませる。六ッ過より天武天皇へつれてゆき、太鼓をたたくところをさんざん見て甘酒二盃のませ帰り、竹の筒に入れてある水やうかんと云物を買ふてくれと云故買ふてやる。たつた三文也。節の方へきりで穴をあけてよこす。帰つて筒の方より吹くと、ぐつぐつと云て竹の中より出る。おばふいやらしがるを面白がりふいては出し吸ふては引つこませ、若い手合おかしがる。

同年七月十三日

子供大勢にてハアサンダ、ハサンダ、かにながどべの子ハアサンダと云て歩く。鐐之助小さな弓張ちやうちん付て子供どうしあ

そびに出て、ローソクが少しになると付替てくれと云て通り二度付替る。

同年七月十四日

鐐之助今日も度々水あび、近所にて云には、渡部では鐐こを大事にするに似合ず、かまわず水あびさせると云たげなが、何でも世間並にあびさせ、からだをきたへるがよし。

同年七月二十日

新地のおてつ盆礼やら何やらかやらの礼に、早まき大根をすぐつたとて持てくる。日記を読み始めると、おてつ耳をすませて聞き申には、咄してさへ云残しもあるものを、よくもよくも事こまかに書いて御座りますとかんしんする。日記の内お六口さびしくなると、おまんま一ぜんづつ五六度も食べるとあり、身体のためにはよかるふが、外に何も食べる物がなき故なるべし。ほんにかわゆそう也。夫に引き替鐐之助は、せんべいおこしなど食べると云ても手も出しはせず、太白せんべいなければいくらも食べ、目ざまし又は相の食べ物不足なし。おろくと引きくらべて大の仕合せとおばどとおて

つの咄也。

同年十月十二日

今晚又ねづみ障子を食い破り入り候故、まづばだかで出て穴をふさぎ、鐐をおぼの所へやり、着物をきて行燈をつけると、ねづみ騒ぎ出す。方々追い廻してもなかなか叩かれず。ついでこへかかくれてしまふ。おなかを起し二人して追ふ。おなか叩き出してついに殺す。鐐目が廻つて歩かれんと云故、背中を押えて手水場へつれていくと、黄水を吐く。それより茶のような小用出す。急ぎこたつをこしらうて寝かせ、一角九五粒用ひ、さつまいもをたべぬかと、おなか持てきてやる。一口食べていやと云。そんならおまんま食へるかと云へば、食べやうと云故、持てきて食べさせれども、一ぜん食ていやじやと云。足まで熱あつても寝ていたことなし。こんどはよくよくのことにて大よわり、もしやほうそうになるふかと甚はだ心配なり。早速医者のところへ留五郎行てくれる。直に来てみて八九分はほうそうのお熱とみへますと云帰る。直にくすりもろふてきて、急ぎせんじ用ひ、鼻の頭

へ汗出る。亥の子につき片山のおぼゞ様お出でなさる。鐐の所へ菓子をつかわす。いづれも大よろこびいたす。鐐之助熱さへなければむしやむしやくうであらうに、こんべい二つばかりたべたばかりにて食わず。七ツ時分よりおせんの方よりつかわし候ぼた餅、小指の頭ほど二口食う。うんこが出たへと云故、つれてゆくと、こりやいやらしい、よくなつてしつこばつかり出そふだと云て、小用は大そう出し、寢床に上るとべつたりと顔をふとんにつけて居る故、どうしたときけば、目がまつてならぬと云。熱強き故也。おまんまを食べぬからだ、食べるがえ、それでも目がまわつて食べられぬ、そんならおじゐさがくくめてやらふ、目をふさいでいて食べやれ。あいと云故茶漬にたまりをかけ、茶漬をくくめてやる。かるふ一ぜんようよう食べる。六ツ過になるとおじゐさと寝やう、おぢゐさねなへと云故抱いて寝る。今日は朝より鐐のそばにつきどうしなり。

同年十二月二十二日（鐐之助七歳）

昼過柏崎より書状とゞく。早速開封先以皆々無事、子供二人とも軽きほうそうすみし由。久しくたよりもなく案じゐたところ先々大安堵也。鐐火たつにあたり居、おとつき、おかつき、どんな顔だらふねへ。鐐は忘れたか、鐐忘れたおろくも真吾もどんな顔だか見たへなアと云。そんなら越後へ行がえ。鐐誰がおじゐさもおぼはおぼも行ならいく。おれ斗誰がいくもんだ。殿さまがおとつきを越後へやりなつた。鐐はおとつさの子だから行がえ。鐐ナンシニおじゐさの子だ、おぼもおじゐさの子だ。ナニサ鐐は越後のおつかさが産みなさつたのさ。そふでなへ、そふでなへと首を振る。

一八四三年四月五日

鐐抱いて寝るとうれしが、しがみつくやらなめたりさすつたり大喜び。二二ヶ四云ぜと二九八三三ヶ九より三四十二まで、その次三五……と寝てしまふ。

同年四月九日

鐐夜前双紙二冊捨て遣し、今朝留五郎方へ多分下習におぼゞつれてゆく。

同年四月十五日

鐐いろはの清書いたし候よし。

同年九月十六日

鐐之助手習に行と、八田紋兵衛云、鐐こ

はぜ釣につれて行ぜやと云と、手習どころか一散に家へ帰り、紋兵衛さが釣につれて行なるから、蛤買ふて来てくんなへと云故、水車へ行買ふてくる。留五郎が蛤を細かに切てやるやら、おばぶが弁当飯を拵ふやら、大騒して頼んでやつたげな。

同年十一月十四日

鐐之助大学珍らしく読む。

一八四四年一月二日（鐐之助八歳）

鐐之助書初の紙おばぶ買て来る。

同年一月六日

鐐之助、いつの間にか脇差の留を取、砥石を持出しとぐとて、右の手の親指のふしの処を少し切、したゝか叱られ大にこまる。悪い奴えゝ気味じや勝手にしろと、お婆井戸端の血を流し塩を蒔。奴息の音ころしてゐる。即効紙を張てやると直に遊びに出る。大腕白故手にか足にか少しづゝのきずの絶ることなし。

同年二月三日

鐐明日より丸山へ手習に遣すつもり。

同年四月三日

鐐之助今朝は早く起し丸山へ遣す。早く

戻り今朝は第一番に行たと歎ぶ。

同年五月三日

鐐今朝は当番だと夜前云故早く起す。

同年七月五日

鐐、二階より石取車を下し、平治に赤紙にて幕をこさへてもらひ、提灯もこしらふてもらふ。明王院に幣束と七五三も切てもらひ、夕方までに出来上り候故、今日は手習より帰り、内に居通しだけな。

同年九月十二日

鐐朝に行帰るとのろし入置箱持出す故、

おばぶ云には又箱を持出す。手習から帰るまでに御じいさに赤い紙と青い紙とついでもらつて置くから、書物をふくしやれと云。大学などはふくしたことがなへから大学をふくするがよかるふと云改、漸大学をよむ。大分忘れたところあり。毎日持て行ながらその様なことがあるものかと呟つても、一向平気な顔してゐる。

（つづく）

幼児の教育 第七十六巻第十号

十月号 © 定価二〇〇円

昭和五十二年 九月二十五日 印刷
昭和五十二年 十月 一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所 フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。